

景観特性と構成要素（一覧）

資料 2

景観特性	構成要素
<p>1 地勢</p> <p>地形・流域など「大景観」として生駒のアイデンティティを表現している。</p>	<p>(1) 流域の谷空間</p> <p>生駒市は、竜田川と富雄川の二つの水系から成り立っています。それぞれの河川を中心とした特有の地形があり、独特の谷空間が形成されています。</p> <p>(2) 聖なる生駒山</p> <p>生駒山の姿は、生駒谷のあらゆる場所から見えます。その雄大でシンボリックな山容は、古来より霊山として人々の遥拝の対象となってきました。生駒山の山麓は、霊山の懐にいだかれる空間として修験が盛んに行われる場でもありました。</p>
<p>2 地域性</p> <p>自然、田園、市街地景観など「中～小景観」として場所に依って多様な特性を持つ。</p>	<p>(1) 大地と一体となった集落</p> <p>大地のうねり、川などの自然の地形に合わせ、田畑がまず優先的に配置されてきました。山麓は里山として暮らしの中で活用され、家々は田畑と山麓の境界に立地しています。集落のミチは等高線に沿うように曲がりくねり、家々はミチに寄り添うように配置され、集落は大地と一体となっています。</p> <p>(2) 共同生活と信仰</p> <p>集落の中では、人がよく通るところ、使うところ、溜まりやすいところが、共同生活の中心の役目を果たしてきました。そこには火の見櫓が設置され、集会所や公民館が立地しています。また生駒谷の各集落では「七つモリ」が、数々の言い伝えとともに受け継がれ、現在も大切に守られています。集落は共同生活と信仰が構成の原理となっています。</p> <p>※七つモリとは：生駒谷の各集落に存在する樹林で、それぞれ7つ程度存在する。木を伐ったら崇りにあった、等の言い伝えが現在も語り継がれており、周辺の住民から大切に保護されている。</p> <p>(3) 伝統的な要素</p> <p>気候や風土、生業などに適合するよう、生活の中で工夫が重ねられ、長い年月をかけて智慧が蓄積されてきました。それが伝統的な形態や意匠となって、今に伝えられています。それらは人々が意識しない無意識化の潜在的なルールとなっており、隠れたデザインコードともいえます。</p> <p>(1) 骨格となる地形との対話</p> <p>1960年代に生駒谷の谷筋の平地部から始まった住宅団地の開発は、年代を経るにつれ生駒山麓や矢田丘陵の斜面地などの標高の高いエリアに広がっていきました。こうした開発によって、骨格となる地形と対話するように、視線の先に山が見える通りや眺望の開ける場所が生み出されてきました。</p> <p>(2) 通りの空間尺度</p> <p>通りの幅員や空間構成と街区・敷地の形状や大きさは街並みを構成する基本的な要素であり、街並みの基盤となっているものです。これらの基盤は市街地が開発された年代ごとの時代性を反映したのもでもあります。それぞれの基盤のあり方に応じて通りの街並みが方向づけられます。</p> <p>(3) 敷地の表情</p> <p>道路などのパブリックな空間から見える敷地の際は、街並みの表情を生み出す重要な要素であり、セミパブリックな空間といえます。それぞれの敷地の敷地のしつらえは通りに表出し、それが連続して街並みを形作っています。</p> <p>(4) 人々を迎え入れる駅前空間</p> <p>駅前には市外からの来訪者を迎え入れ、まちの印象を左右する“顔”となる空間であり、景観形成上非常に重要な役割を担ってきました。印象を高めるべく、駅舎や駅前空間の整備、再開発事業等が一定のコンセプトに基づいて行われ、周辺の景観形成にも広がっています。</p>

	<p>(1) 機能的でありながら調和した幹線道路の空間</p> <p>幹線道路沿道は日常の暮らしで車の中から目に触れる機会が多い景観です。車の利用に適した形で機能性が重視される傾向にありますが、隣接敷地や周辺との調和、しつらえや演出の工夫を採り入れ、機能的でありながら一定の調和が取れ、気持ちの良い沿道景観を創っている取り組みも見られます。</p> <p>(2) 商店街の親密な空間構成</p> <p>生駒の商店街は宝山寺詣での参詣道を中心に線状に発展し、旅館など歓待のための店舗が軒を連ねました。現在は地域住民の買い物の場ともなっていますが、往時の業態・たたずまいを色濃く残しています。また、商店が通りに面して様々な演出・工夫を採り入れてきました。こうした作法がにぎわいを形作っています。</p> <p>(3) 駅を中心とした日常のゲート空間</p> <p>駅前は通勤・通学のゲート空間として日々多くの住民に利用されています。日常の景観の印象を左右するという意味で重要な空間であり、駅舎、駅前のデザインのみならず、線路や駅からの周辺の見え方、生駒山系への眺望など、より気持ちの良い空間とするための要素があります。</p>
<p>3 暮らし</p> <p>生駒の景観は人々の暮らしの中で支えられている。</p>	<p>(1) 生業の風景</p> <p>古来より人々の暮らしを支えてきた生業の場である農地（ノラ）は平地に広がり、また斜面に沿うようにつくられ、里山や奥山（ヤマ）や居住空間（ムラ）と一体となり農の風景をつくっています。また、地域の風土の中で培われてきた茶釜や竹器製造、酒造りなどが固有の伝統産業の風景を生み出しています。</p> <p>(2) 仮設の風景</p> <p>毎年めぐってくる年中の様々な祭事や催事、人生の節目で訪れる儀礼は、暮らしの中に根付いた文化として受け継がれてきました。これらの特別な時期には見慣れた風景も特別な装いを見せます。それは常時目にする日常の風景に対し、一時的に表れる仮設の風景でもあります。</p> <p>(3) 身近な環境改善のアクション</p> <p>一人ひとりが自らの身近な環境に対して目を向け、より良くしていこうという意識が芽生えることで具体的な取り組みにつながり、それが景観に良い影響を与えます。意識を醸成し、取り組みを始め、活動を広げていくプロセスにおいて、一人のアクションからグループや地域のアクションへと広がっていきます。</p> <p>(4) 人々の原風景</p> <p>人々が目にする風景は、それを見る者の価値観が反映されたときに景観として立ち現れてきます。人は誰でも人格を形成する過程で体験した風景画原風景として心に刻み込まれています。原風景は、景観の見方や感じ方、景観を評価するときの価値観に無意識下で影響を与えています。</p>